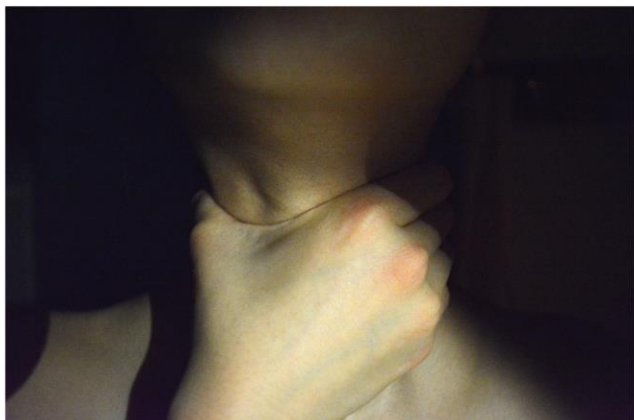




MOJIBAKE

顧問作品解説

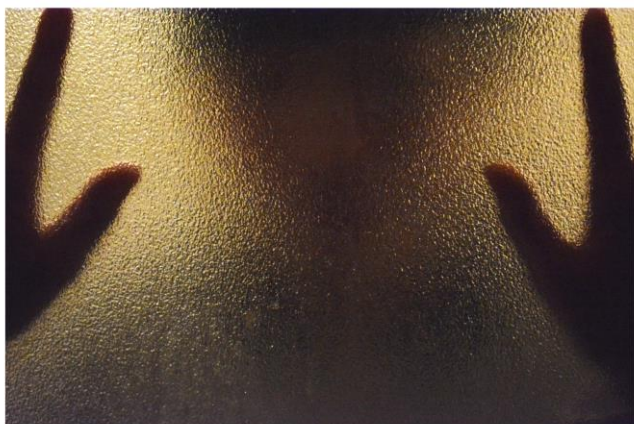
謎めいた写真である。メガネの奥のこやかな目、その下に意味不明な文字の羅列。読み解こうとしてみたが不可解。入部して間もない作者だが、独自の感性で作品作りに挑んだ。なかなか最初からこうはいかない。無難に見栄えのいい風景写真なんかを撮る例が多いのだが、この作品には、みじんも迎合するところがない。他者の理解すら求めている突き抜け方は、ある意味、とても大事な姿勢でもある。課題は、作品を見て下さる人との「折り合い」のつけ方か。大げさになるが、これは芸術の永遠のテーマである気がする。



suicide

顧問作品解説

コワイ写真。これをテーマに持ってくるのは、人目を気にする人には難しい。入部当初から、超マイペースで写真を取り続けている作者だが、おもしろい写真をたくさん撮ってくる。「自死・自滅」のイメージで組んでみたということだが、最初のプランでは、再生をイメージする「卵」を持ってきていたが、他の写真とのバランスを考えて、こちらに落ち着いた。一番下の左下の赤い花が、唯一残された「生命」の灯火のようにも見えた。この色がなければ、もっと沈んだ写真になると思うのだが、いかがだろうか。





おばあちゃん家

(奨励賞受賞 全国大会推薦作品)

顧問作品解説

全 276 作品中、トップ 10 入りを果たし、今夏の全国高等学校総合文化祭写真部門宮城大会への推薦が決まった。和歌山にあるおばあちゃんの家での撮影。犬が大事にされていることがよくわかる。どんな時も一緒なのだろう。洗濯物を干し終わるのを待ち、足を拭いてもらっては、楽しみの散歩に出かける毎日。右端の写真で、屋根の間から見える山の景色にも、暮らしぶりが垣間見える。ほのぼのとした空気感が満ちていて、見る人を温かな気持ちにさせる秀作だ。



正月のごちそう

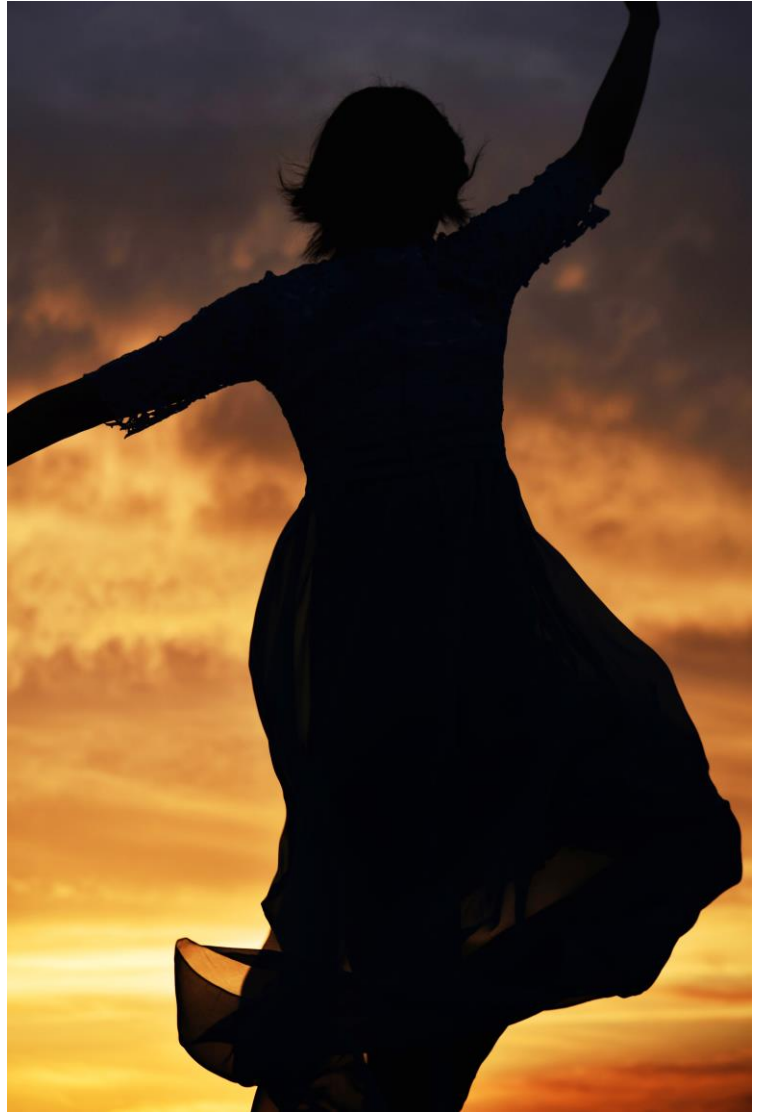
顧問作品解説

何を食べているのかとよく見れば、どうやらカニのようだ。下に見えるのは土鍋のフチか。鍋を家族でつついている時の撮影だろう。よく似た顔のきょうだい、満面に笑みを浮かべてカニを食べる楽しい家族の記録である。写真には「記念」の意味合いが強いものと、「作品」に適したものがある。優劣ではなく、性質の違い。この写真の場合、前者の性質が強い。その差は、その場にいた人だけが思いを共有できるのか、第三者までもが「想像力」の力で思いを共有できるかというところ。「作品」には、必然として後者の要素が問われる。

影

顧問作品解説

夕焼けの空をバックに、女性のシルエット。パッと目を引く美しい写真だ。シルエットは形が命。表情や色という要素が捨象されている分、見る人が形から思いを読み取るからだ。美しい空の様子に惹かれて、夢中で撮ったのだろう。その分、少し絵作りが雑になったのが残念。両手先を切ってしまうとそれだけで違和感が出てしまう。シルエットが小さくなくても構わないので、もっと引いて撮



り、空間に余裕を持たせると良かった。そうすれば窮屈な感じが緩和され、伸びやかさが感じられたはずだ。



極（きわみ）

（優秀賞受賞 全国大会推薦作品）

顧問作品解説

全 276 作品中、トップ 4

に入り、今夏の全国高等学校総合文化祭写真部門への推薦を決めた。

被写体は堺の包丁作り職人。まず自分で足を運んで許可を得て、撮影をした姿勢を評価したい。赤く焼けた鉄、工場の雰囲気、包丁を研ぐ手、そして仕上げを確かめる鋭い眼。過不足ない組み方

で、職人の仕事ぶりを表現した傑作と言える。情熱を注いで作品を仕上げようという気持ちがクオリティを上げていく。技術などは後からいくらでもついてくる。情熱が行動を起こし、行動が質を上げる好例。

4 人

顧問作品解説

実際にこの光景を見て、
このような写真が撮れる人は、
ほとんどいないだろう。
両端のマネキンと中央の
信号を等価に見て、さらに
下に人物を配して、4
人を捉えることが出来るの
は、特殊な能力という他
はない。惜しむらくは、コン
テストなどでは、見た瞬間
のインパクトが物を言うこと
が多いため、この面白さに
気づかないまま、スルーさ
れてしまうかもしれないこと
だ。しかしよく見ればジワジ



ワと面白さが伝わる写真である。写真は「発見が」8割、残りの2割が、切り取り方や
仕上げである。たかが2割されど2割、それだけに大事にせねばならない。

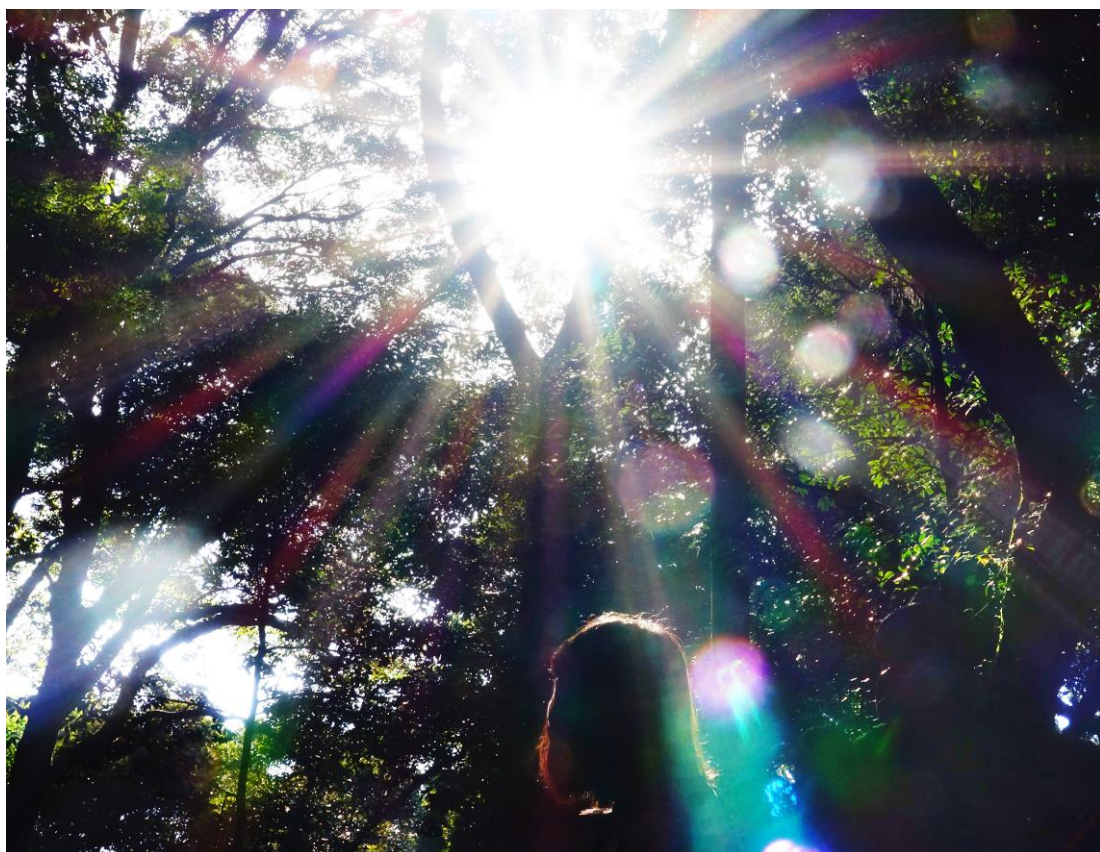


姉たち



顧問作品解説

たくさんの姉たちが、就寝前にリラックスしている様子がよく伝わる。家族写真には、プロの出番はない。どれだけ技術が優れていたとしても、家族にしか向けない表情や、警戒心ゼロの普段の様子を撮ることはできないからだ。その意味で、この写真を撮れるのは、作者をのぞいて他にいないのかもしれない。課題は、その写真に、プライベートを超越した普遍性を与えられるかどうかだ。プライベートを脱しないものを記念写真と呼び、それを超越したものを作品と呼ぶ。これは、記念写真と作品との中間地点。あと一步で作品になる。



森の少女

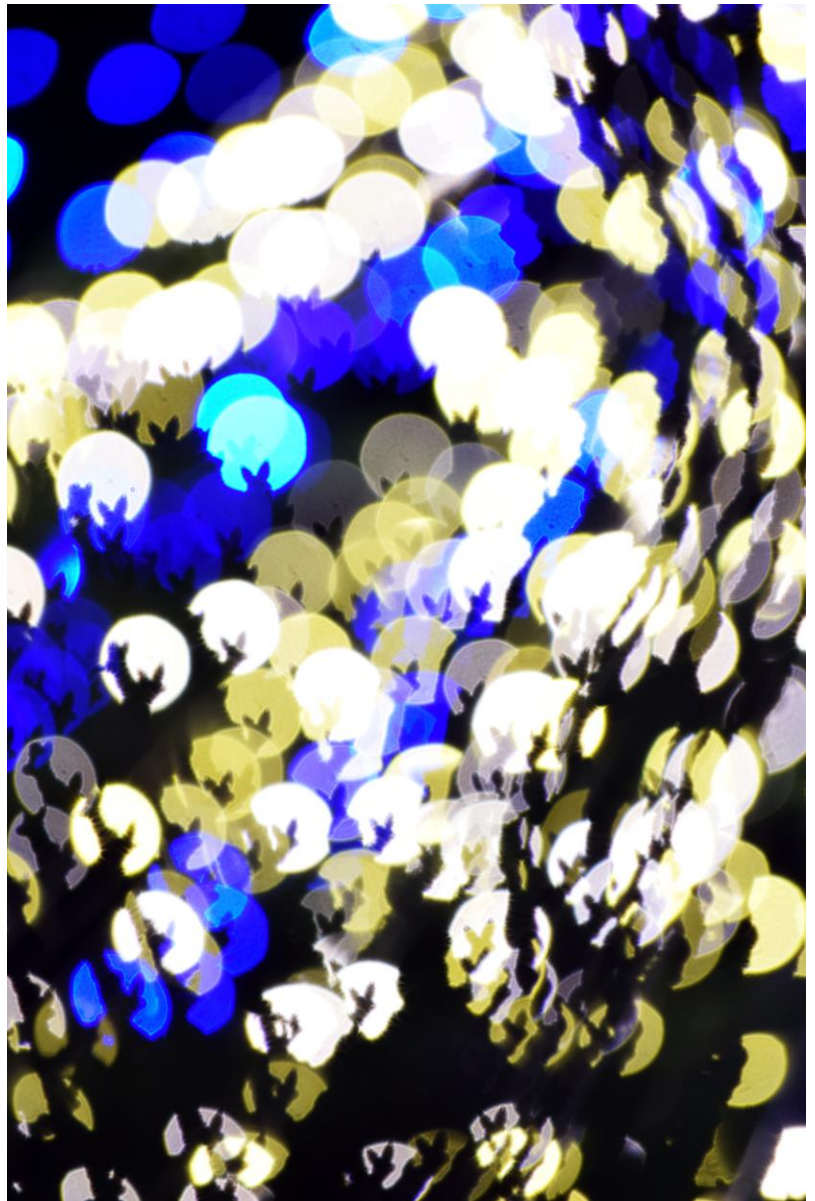
顧問作品解説

強い光、木々の様子、そして少女。要素としてはなかなか作品的である。太陽の方にまともにカメラを向けたせいで、フレア(実際には存在しないボケや像)が派手に出ているが、これはこれでいい気もする。しかし、タイトルにもなっている主役の少女の様子が、後ろ姿のほぼ頭部だけというのが気になった。主役には主役なりの存在感を与えねばならない。それには太陽光が強すぎる。もっと木の陰に隠すなどして、太陽光の存在を控えめにして、主役の少女を目立たせるようにすれば、タイトル通りの写真に近づいたのではないかな。

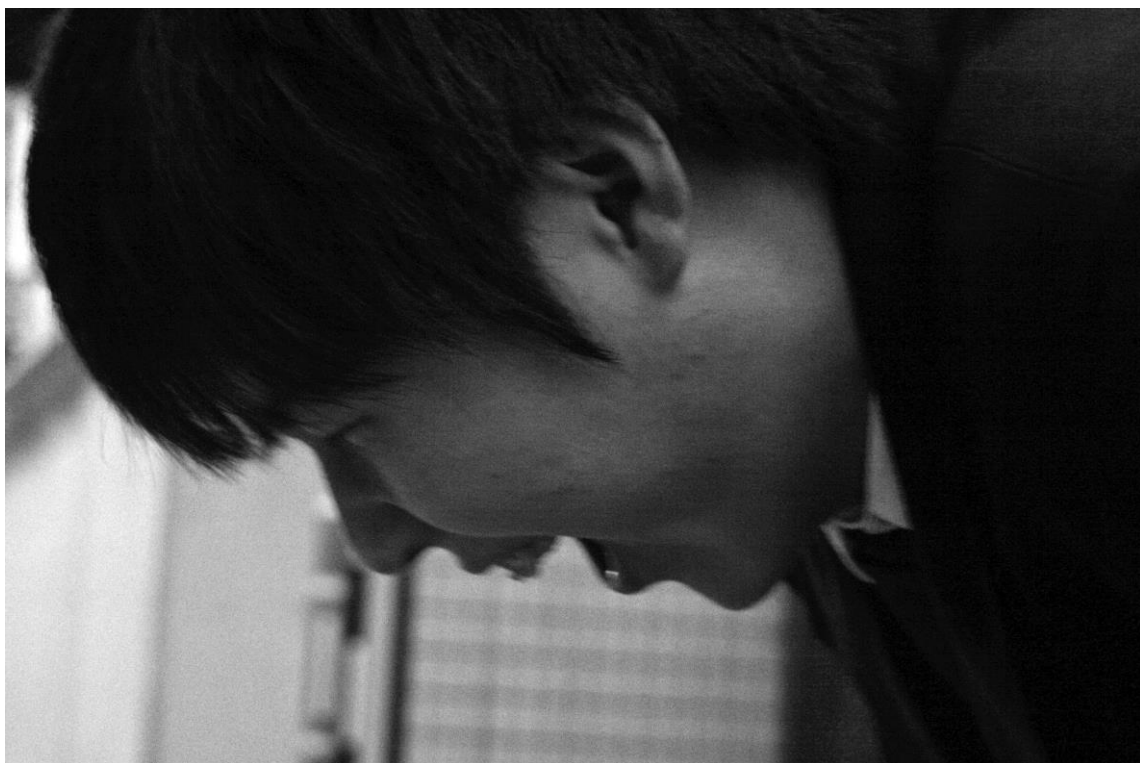
ピース

顧問作品解説

不思議な写真だ。実際はとても奥行きのある風景を撮っているのに、奥行きを感じないのも奇妙だ。何を撮ったか当てられる人はいないだろう。種明かしをすれば、ピースの正体は木の芽、カラフルな丸ボケはイルミネーション。撮影現場にいないければ私でもわからない。なぜこんな絵柄になったのかは不明だが、レンズの起こした奇跡。肉眼では決して表現



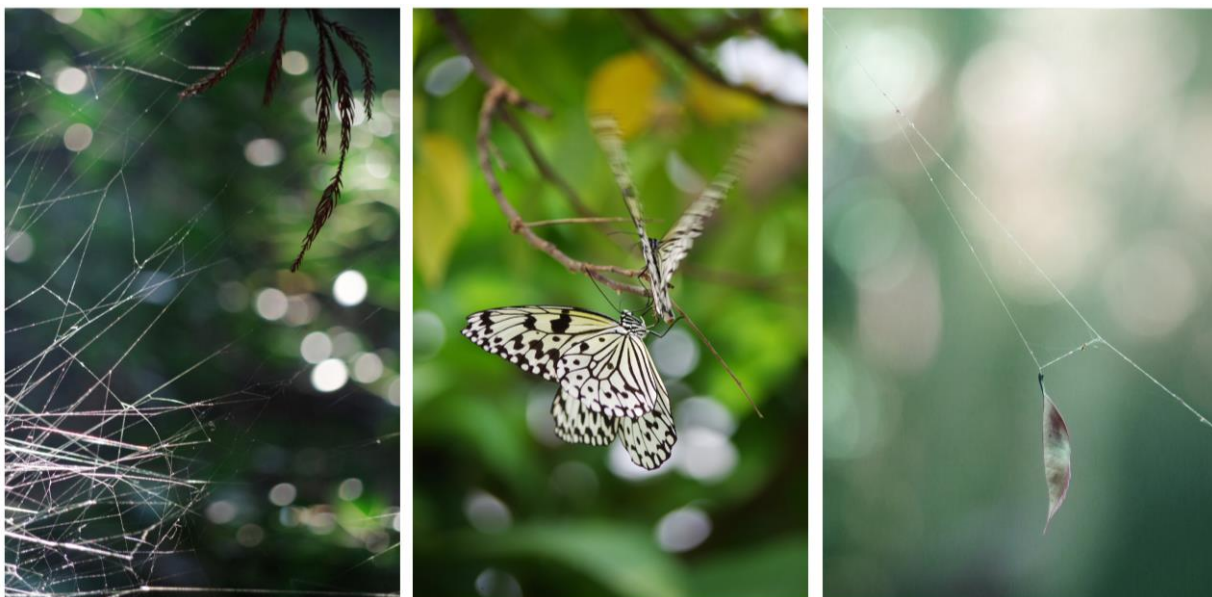
できない世界が写真にはたくさんある。これは一つの習作としておき、次に似たようなシチュエーションに出会ったとき、さらにクオリティーの高い作品へと昇華するとよい。



RAGE

顧問作品解説

タイトルの理由を聞くと、怒っていた友人を撮った為「怒り」を意味する単語にしたとか。それを聞いて驚いた。どうみても、笑い転げているようにしか見えなかったからである。怒っていても笑っているように見えるなら、その逆のこともあるかもしれぬ。写真は結構嘘つきだ。「名は体を表す」というが、「真を写す」という名は、時として実態にあっていない。ならばいっそ、現実を無視して、見えている通りのタイトルにする方が良いかもしれない。笑いの中にも怒りがあり、怒りの中にも笑いがある。矛盾した感情を同時に内包するのが人の姿かもしれぬ。



虫になりたい

顧問作品解説

蜘蛛の巣の間で、羽根をはためかせる蝶々。何やら不穏な空気もある。蜘蛛の巣にかかれば、美しい蝶の命もはかなきものとなる。絵的には一枚一枚それなりに美しいのだが、まだ組写真としての完成度は高くはない。コンセプトが定まっていない為である。組写真ではなく、絵合わせになってしまったのだ。何故、1枚ではなく、複数で組んで見せるのか。その意味をもっと追究する必要がある。複数で見せるということは、ある意味、構成力やテーマ性を求められる点において、単写真より難しいのである。そこを勉強すれば、作品力は上がる。



じーっ

顧問作品解説

小猿の視線の先には何があるのか。円らな瞳が愛らしい。リスザルは、猿の中でもたいへん小さく、またすばしこいので、撮影するのも大変だったかもしれない。ややピントが甘いのが惜しまれるが、背景の緑が、環境も示しており、動物園の檻の中に暮らす猿とは一線を画している。動物写真は、撮影技術よりも、生態を知ることの方が大事。相手をよく知れば、最も魅力的な瞬間もわかるからだ。写真に必要な態度は、肉眼でまずじっくりと相手を観察すること。写真に撮るのは最後の最後、相手を知り尽くしてからでよいのである。

恋の行方

顧問作品解説

リンゴに仮託して、実らぬ恋を演出したものか。一番下のかじられたリンゴが、崩れたハートマークの陰を作っている。よく考え抜かれた構成で、努力賞は授与したいところ。しかしまだまだ爪が甘い部分がある。こういった演出はとことんやり切るのが原則。おそらくは時間切れだったのだろう。まだやりきったという感覚は本人にも感じられていないのではないか。「なんちゃって失恋」ではなく、ハラハラドキドキの恋の行方を映像化して欲しい。見る人を本当に切ない気持ちにさせられたら、本物である。

